いなみ野ため池ミュージアム

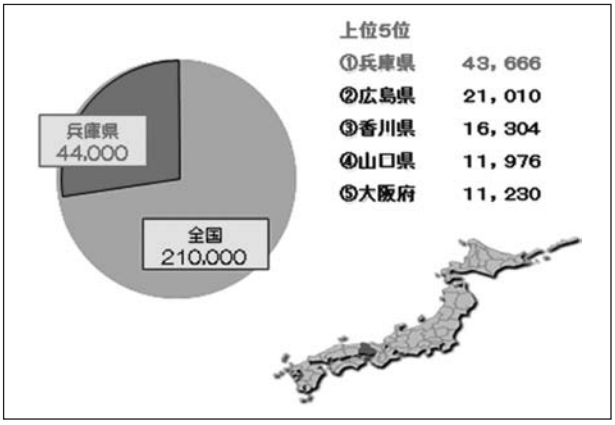
いなみ野ため池ミュージアム運営協議会

1. はじめに／「ため池」の歴史と現状

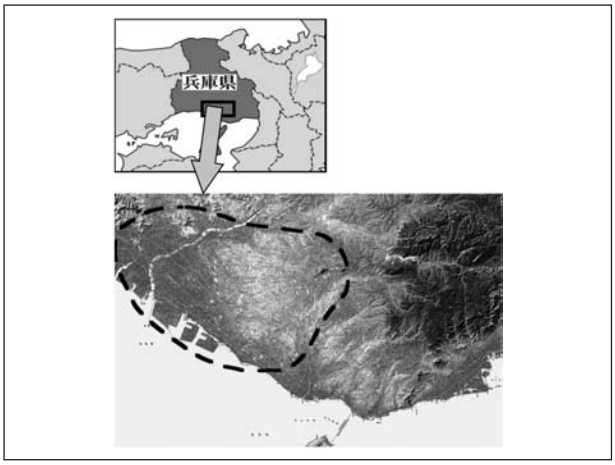
(1)「ため池」の歴史

「ため池」は農業用の水を貯えるため、弥生時代に始まったといわれる水田稲作の発達とともに数多く造られてきました。現在、国内には21万ヶ所の「ため池」があるといわれ、気候的、地形的条件から水の確保が難しい瀬戸内地域に多く存在しています。都道府県別では、図－1のとおり兵庫県の「ため池」数が群を抜いています。

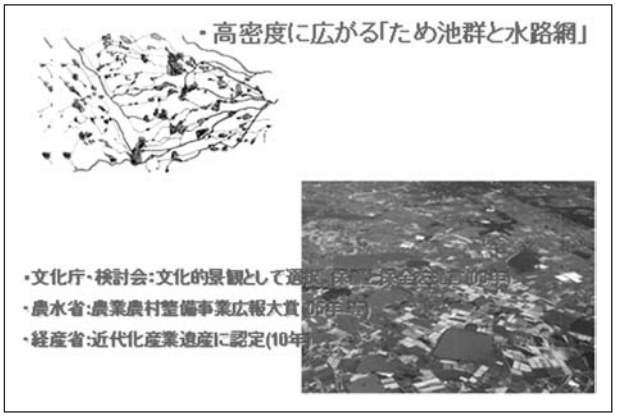
兵庫県南部の中央部に位置する東播磨地域(図－2：明石市、加古川市、高砂市、稲美町、播磨町)は周囲を海や河川に囲まれ、万葉集で“いなみ野”(伊奈美、印南、稲日、稲美、不欲見(野))と詠まれた台地状の地に古くから人々の暮らしが営まれてきました。この地域にある「ため池」の数は約600ヵ所と比較的少ないものの、県下最古の池(西暦675年築造)や最大の池(満水面積49ha)、多様な生物が生息する池、素晴らしいビューポイントを持つ池、築造時の伝説が残されている池など、個性的な「ため池」が点在しています。また先人たちは、この地域の風土を活かし、築造した個々の「ため池」を、台地上の等高線を巧みに利用して張り巡らせた「水路網」で繋ぐ高密度の水利ネットワークを築き上げてきました。この「ため池群と水路網」(図－3)は、今もこの地を潤し続け、「ため池」にまつわる文化(水利慣行、神祭事等)を育み、“いなみ野”の風景を特徴づける大きな存在となっています。



図－1　ため池分布



図－2　「いなみ野」の位置



図－3　ため池群と水路網

(2)「ため池」管理の今日的課題

東播磨地域は、神戸市と姫路市の間に位置し地域内人口70万人を超え、商・工・住など都市的機能の比重が高く、市街地の中やその周辺部に「ため池」をはじめとする“農”に関連する施設が混在している状況です。居住者をみても、圧倒的に農業に携わっていない世帯の割合が多くなっています。また、“農”を取り巻く状況も楽観できる状況ではなく、農業従事者の高齢化や後継者不足も顕在化しています。

このようなことから農業用施設である「ため池群

図ー4　ため池管理に対する負荷

と水路網」の維持管理についても十分に行っていくことが難しくなっています。加えて、都市化の進展が著しいこの地域では、「ため池」への生活雑排水の流入や不法投棄ゴミの増加、それに伴う水質汚濁や悪臭の発生、これらを巡る「ため池」等の管理者(農業者)と都市的住民(非農業者)との間の軋轢等々、「ため池」の管理をより困難にしている問題も山積しています。この状況を打開していかなければ、コミュニティの崩壊といった最悪の事態を引き起こす可能性も否定できません。

2.「いなみ野ため池ミュージアム」／「ため池群と水路網」を活かした地域づくり

1千数百年の時をかけ築き、守り続けられてきた「ため池群と水路網」は、その歴史的・文化的な意義や現在的な役割(農業用水の供給という本来的な機能のほか、多面的機能＝洪水調整、親水空間等々を持つ)は、農業に携わる者も携わっていない者も共有出来る価値であり、一緒になって守るべき"地域の財産"です。

図ー5　ため池の現在的価値（多面的機能）

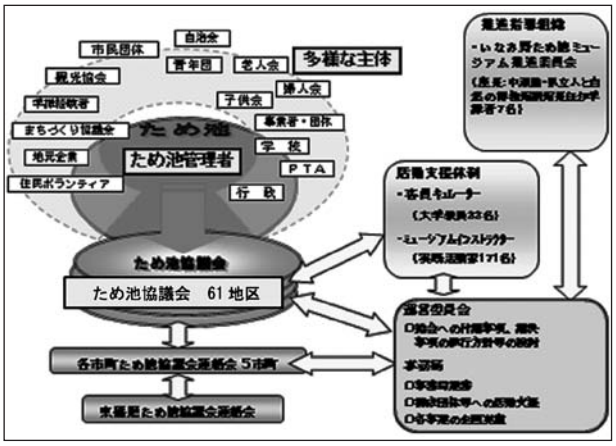
このような考えを軸として2002年に始まった「いなみ野ため池ミュージアム」は、多くの人々の参画と協働のもと、先人の遺産を『守り・活かし・次代に継承する』ことを基本方針として、次のような取り組みを進めています。

(1) 体制づくり

活動の基礎となる組織として、各ため池に、ため池や水路を核とした地域づくりを進める「ため池協議会」の整備が順次進められてきました(構成団体:ため池管理者や、自治会等の地域団体、学校、事業者・企業等地域の実情に合わせてメンバーを編成)。

現時点で61の「ため池協議会」がそれぞれの地区の特徴を活かした活動を繰り広げています。

併せて、各「ため池協議会」を市町及び東播磨地域全体を単位とした「連絡会」が設立され、人や情報、活動が交流する場を広げながら、地元メディア、JA、調査・研究団体やNPOなど水辺空間との関係が深い主体の参画を得、現在の形「いなみ野ため池ミュージアム運営協議会」(2007年3月発足、現在88団体が加入)へと発展しました。



図ー6　「体制づくり」概念図

(2) 人づくり

一般には馴染みが薄く地味な存在である「ため池」や「水路」に対する関心を高め、「ミュージアム活動」への参画を促していくため、多様な切り口で紹介する講座(大学との連携講座、市民講座)を開設・運営しています。

※カリキュラム：「ため池」の生態系、水質浄化手法、地理学からみる「ため池」分布、「ため池」と景観、水利慣行、「ため池」の神祭事、「ため池」のアグリビジネス、ため池ツーリズム、築造技術の変遷 等

また、「ため池」や「地域づくり」をテーマに研究活動

図―7・1　講座「いなみ野ため池学」講義風景

図―7・2　客員キュレーター=水辺の地域づくり活動への助言

図―7・3　ミュージアムインストラクター活動風景=環境学習フィールドワーク

図―8・1　魅力づくり(「ため池博覧会」)

図―8・2　魅力づくり(ウインドサーフィン教室)

図―8・3　魅力づくり(オニバス観察会)

や実践活動を行っている学識者(客員キュレーター制度)や団体のメンバー(ミュージアムインストラクター制度)で組織する支援チーム(約240名)を設けています。「ため池協議会」の設立やそれぞれの地区で行われている「ため池・水路」活用イベントの企画・運営、新たな利活用策の検討等の段階で彼らが持っている豊富な知識や技術が活躍しています。

(3) 魅力づくり

個々の「ため池」のセールスポイント(希少な動植物、築造伝説、神祭事、景観等)や四季折々の催事(観桜会、観月会、地域の祭り等)、利活用施設(四阿(アズマヤ)、散策路、花壇等)を“食・遊・観・学”をキーワードに組み合わてイベント化し、実施。広く一般の人が気軽に「ため池」に近づける機会を提供しています。

平成17年5月28日～平成18年3月29日の間、蓄えてきた“魅力づくりイベント”を集中させ、リレー方式で「ため池博覧会」を開催(会場;東播磨全域、イベント数；250件)。ミュージアム活動への参加者の裾野を拡げました(博覧会参加者；324,567人)。

(4) 調査研究

「ため池や水路」の管理面での課題や利活用方法について調査研究を行い、地域づくりの新たな展開策を模索し、実用化を進めています。

※調査研究課題

□管　理:「ため池」管理の法的責任や事故保険制度、後継者対策、ため池管理マニュアルの整備等

□利活用:「ため池」を活用したコミュニティビジネスの可能性、「ため池」での淡水真珠の養殖、「ため池」の水質調査活動の実践ノウハウ、「ため池」の栄養塩を放流することによる豊かな海の再生・試行、里山の竹林管理(伐採した竹をパウダー化し、土壌改良剤・消臭剤として活用)と「ため池」保全(里山からため池への流入水路の維持管理)、池干しによる外来魚の駆除と肥料化 等

図―9・1　調査研究活動循環する水の路　ため池の栄養塩を瀬戸内海へ)

図―9・2　調査研究活動(「里・ため池」と「海・漁協」の連携)

図ー9・3　調査研究活動（里山の竹林伐採と竹材の活用）
ー「ため池」への流入水路の確保と竹材を土壌改良剤へー

図ー9・4　調査研究活動
（「ため池」管理の基本　池干し ～外来魚の駆除と飼料化～）

(5) 普及啓発

メディアへの積極的な情報の提供（TV、ラジオへの出演、雑誌への投稿等）やホームページの開設・運営（http://www.inamino-tameike-museum.com）、各種シンポジウムやフォーラムの定期的な開催。ガイドマップ作成・発行等啓発活動を展開しています。

図ー10・1　普及啓発（フォーラム等の開催）

ため池の役割知ろう

多様な価値、「大切さ発信」

専門家らを招き

10・11日シンポ

図ー10・2　普及啓発（シンポジウム開催）

図ー10・3　普及啓発（疏水開発の歴史・読書感想文表彰式）

3. 原点回帰／「いなみ野ため池ミュージアム」これからの展開

(1) ふりかえって

「いなみ野ため池ミュージアム」がスタートして11年、ミュージアム活動を推進する「いなみ野ため池ミュージアム運営協議会」が発足して5年経過しました。この間、「運営協議会」や協議会を構成する主体それぞれが持つ力を発揮し、地域づくりを進める様々な取り組みを積み重ねてきました。これまでの取り組みをふりかえってみます。

① 関心の高まり

「ため池」に気軽に“近づき、親しみ、学ぶ”イベントの実施を通じて、幅広い層の参加者の「ため池」に対する理解が深まり、関心の高まりが伝わってきます（「ため池博覧会」を除き、水辺のイベント：平成15年→平成23年＝49回、5,800人参加→265回、64,000人参加）。

② 支援グループメンバーの増加

学識者や実践団体等のメンバーからなる支援グループのネットワークを介して、ミュージアム活動を支援するメンバー（客員キュレーター、ミュージアムインストラクター。前ページ参照）が増加しています（平成15年→平成23年=63人→240人）。

③ 新たな層の参画

「ため池・水路がかかえる多様な課題の調査研究、実用化実験(詳細は前記)の過程で漁業協同組合や環境研究機関 等「ため池」や「地域づくり」に直接的な関係が希薄な組織やメンバーの参画を得ています。

④ 外部評価によるモチベーションの高揚

ため池や水路をテーマとする研究会・シンポジウム等の開催や研究論文等の作成支援、電波や印刷メディアを通じて内外との情報受発信により新たな視点での評価を得ることが出来、ミュージアム活動へのモチベーションが高まっています(例：国際ため池シンポジウムの開催、JICAと連携したインドネシアの自治州への農業灌漑維持体制の指導・助言、“ため池百選”“疏水百選”“淡河川・山田川疏水、近代化産業遺産”等の受賞)。

以上のように一般的なプラスの効果は比較的容易に挙げられますが、ゴールの無い取り組みである「地域づくり」活動では、プラスの余韻に浸ること無く、タイミング良く“原点回帰”を繰り返していくことが必要です(今回の受賞は、まさに原点に立ち返る絶好の機会を与えていただいた出来事です)。

(2) 次代につなぐ

繰り返しになりますが「ため池群と水路網」を『守り、活かし、次代に継承する』ミュージアム活動の基本に立ち返り、これからの取り組みの方向性を整理してみます。

◇守る◇

「ため池・水路の本来的な機能「農業用水の供給」)の維持は勿論、地域の安全・安心を担保する地域防災の視点をより強化する。

※取り組み例

・今まで口伝えで引き継がれてきた「ため池」管理方法のマニュアル化
・「ため池」の基本的な管理行為を復活させる「池干し・掻掘(カイボリ)実施マニュアル」の作成

◇活かす◇

「ため池・水路」の活用方策を示し、現在的な役割(多くの人の暮らしに寄与する「多面的機能」)を再確認する機会をつくる。

※取り組み例

・里山、里池、里海協働活動の拡充
→ 里山の間伐材や里池の葦を活用した“古代住居”の復元

図ー11　ため池の葦、里山の間伐材を活用した古代住居の復元(県立考古博物館、ため池管理者、明石高専、考古博ボランティアのコラボレーション)

→ 里池の栄養塩を放出し、豊かな海の再生に活用
→ 里山整備(竹林伐採と竹材の商品化)による里池保全(流入水路の確保)
・ため池・水路に自生する植物の活用・商品化(ハス、ヒシ、レンコン、薬草全般 等)
・堆積したヘドロの活用・商品化(固形化し建築補助材に加工)
・「ため池」の水質や生態系など環境学習プログラムの提供
・「ため池」に生息する外来生物の駆除と生態系の維持活動の継続

◇次代に継承する◇

水辺空間を活かした地域の未来像を明らかにし、次代に示し、継承する。

※取り組み例

・水辺空間を活かした地域の将来の姿を描き、実現のための課題の整理と方策を検討するワークショップ、フォーラム等の開催
・そのための体制(「ため池協議会」等)強化

最後にお願いします。「ため池・水路」をテーマに研究されている方、また関心がある方、農業用水利施設の活用方策についてアイディアをお持ちの方、是非ご連絡ください。

いなみ野ため池ミュージアム運営協議会
事務局　米津　良純